

しがじん VOL.23 2021.7

# SHIGAJIN

全障研滋賀支部発行 TAKE FREE!



「ありがとう あゆみ書店」「就学前の現場から」

会員更新・新入会のお願い 今年度方針 学習会報告



## こんにちは 全障研滋賀支部です !



“しがじん”はみんなのねがいをつなげるために、全国障害者問題研究会（全障研）滋賀支部が発行しています。障害のある人に関わる人たちみんなのつながりをつくり、ひろげていきたいというねがいから生まれました。全障研では、障害者や家族の願いを大切に、すべての人の発達を保障するため研究活動に主体的に参加しています。詳しい活動内容については、次ページの活動方針をご覧ください。

### 会員更新・新入会のおねがい

全障研の活動は、会員の会費（年会費3000円）に支えられています。会員になっていただくと、全障研新聞などの出版物が届くほか、全障研主催の学習会に無料で参加していただくことができます。

#### ★郵送の場合

「2021年度会費」と書いて120円切手25枚を同封し、

〒520-0052

大津市朝日が丘1-4-39 梅田ビル3階人間発達研究所付 全障研滋賀支部宛

#### ★mailの場合

件名に「全障研入会申込」とご記入の上、

①お名前 ②「しがじん」などの送付先 ③所属など をお知らせください。

会費納入方法は後日相談とします。

詳しくは、下記までお問い合わせください。

[sunaba.naga@gmail.com](mailto:sunaba.naga@gmail.com)（事務局長 長友志航）



### ・新事務局員紹介・

#### 浦嶋真由美（特別支援学校 教員）

協力員から事務局員になりました。その違い、実はよくわかっていませんが、頑張れたらいいなーと思っています。よろしくお願いします。

#### 佐々木健太（特別支援学校 教員）

野洲養護学校の佐々木です。この度、全障研事務局に入らせてもらいました。これを機に職場でのサークル活動を始めていきたいと思えます。微力ながらお手伝いできればと思いますので、よろしくお願いします。



## ..2021年度方針..

### 2021年度 事務局体制

支部長	白石 恵理子
研究部長	黒田 吉孝
全国委員	松島 明日香
事務局長	長友 志航
事務局次長	森原 都、上神 宗久
事務局	黒田 恵美子、大師 観世、竹下 光、仁村 菜月子、浦嶋 真由美、栗本 葉子、能勢 ゆかり、別所 尚子、谷 彩香、佐々木 健太
協力員	赤星 香早、望月 ふみ、望月 伸明

### 2021年活動方針について

研究部長：黒田吉孝

先日、ある新聞のコラムに共感しました。コラムタイトルは『「社会」はあるのか』です。2年目を迎えたコロナ禍。宝島社の新聞広告の「ワクチンもない。クスリもない。タケヤリで戦えというのか。このままじゃ、政治に殺される」の衝撃的内容。コラム子曰く。この広告は多くの人の実感であると。国民の平和な暮らしとは、いざという時の国家や自治体による支えを前提にしているとも指摘。そして、その信頼があれば、日々の生活がぎりぎりでも、何とか耐えることができると主張。こうした状況があつてこそ、「社会というものが存在する」には同感。しかしながら、この1年間で私たちが体験したのは、逆の現実とも。「社会」の存在を実感させるべき政治家や官僚、そして、大都市圏の知事らも同様に、能力を欠き、国民に安心感を与える施策を打てていないと批判。新自由主義を主導したサッチャー元首相は、「社会など存在しない。あるのは個人と家族だ」と、あからさまな自己責任の政策に打ってで、世界を席卷。日本の現首相も恥ずかしげもなくそれを公言。英国のジョンソン首相は、自らの感染と献身的な治療で奇跡の復帰。その体験が「社会的なるものは現に存在する」とのメッセージを発信。国家による医療制度の充実に向を転換とのこと。コラム子は、日本の政治家と官僚はこのような反省する能力はあるのか。そして、日本という「社会」を立て直す必要がありそうだとの締め言葉。

それにしても、日本の政治のトップは、酷過ぎます。今になってワクチン接種の号令。それまでは世界でも百番台の接種率だったはず。バタバタの理由は明確。今更言いませんが。2日前の新聞記事のタイトルは、「夫婦の年収計 200 万円 子ども 4 人 ミルクの代わりに水」。長引くコロナ禍で生活に困る子育て世帯向け、この3月政府は給付金を配る方針。しかしお金は届かず、家計はじりじりと逼迫。スーパーで、子どもに「ママ、お金大丈夫？」と聞かれる時の切なさ、そして、そんな生活をしたことがない余裕のある人が制度を考えているのではとの訴え。この家族を支えているのは、定期的に食料や日用品を提供している民間団体。しかし、この民間団体も逼迫。「自立 共助 公助」の「公助」がスッポリ抜けている現実。

このような現実が進行していることを踏まえ、総会議案書を事務局で検討しました。この1年の活動を次ページにていくつか紹介します。





### ①研究・学習活動

②全障研プロジェクト（2019）の継続として、養護学校義務制以前の滋賀県の盲学校と聾話学校での知的障害の児童に対する重複学級設置等の教育と権利保障の取り組み等、資料の整理や聞き取りを通して整理し、滋賀県や全国の障害児教育の歴史における位置づけや意義についてまとめます。③実践等で問題になっているテーマについて、「しがじん」等で取り上げ、実践報告を通して学び、共有するよう考えます。

### ②滋賀県での障害児・者等の問題の情勢の学習や実践

滋賀県や全国での教育・福祉・医療等の情勢を広く把握し、事務局等で情報を協議・整理し、会員等に伝えるための有効な方法、例えば、ホームページや「しがじん」等の活用方法を考えます。

### ③広報活動の充実

「しがじん」の発行では、忙しい仕事の「息抜き」になるもの、明日からの実践のちょっとした手助けになるもの、全障研の活動が見てわかるものを大切にし、6月、10月、2月の発行を予定しています。

### ④月刊誌「みんなのねがい」の普及

滋賀支部のあらゆる活動の場で又「しがじん」や全障研しんぶん発送時を活用し、「みんなのねがい」の内容を知らせ普及に取り組みます。

滋賀支部のホームページを充実させ、情報発信、相互交流にいかしていきたいと思えます。支部活動に積極的に関わってもらえるよう、事務局員も頑張ります。



## サークル代表者会 開催宣言

全障研滋賀支部では、ひと昔前全ての特別支援学校に全障研サークルがありました。その交流&連絡の場として、学習会など同時開催で「サークル代表者会議」という活動をしていました。

コロナ禍で、それぞれの会員さん・サークルがどうしているか見えにくい今、またサークル代表者会議が開けるといいなあ・・・という企画です。学校サークルだけでなく色々なサークルが集まるといいなと思っています。



しがじんでは、各サークルの活動を定期的に紹介していきます。次号では「みくもサークル」とオンラインサークルの「マリーゴールドの会」を紹介する予定です。

「こんなサークルをしています」「サークルを新しく作りたい」など、何かあればぜひ事務局員までお知らせください。

# オンライン交流会 報告



去る2月7日、滋賀支部初のオンライン交流会が開かれました。これまで様々な学習会を企画してきましたが、会員同士がつながる機会はなかなかもてませんでした。今回は、いまだ続くコロナ禍においてさらに交流の機会が減ったことを機に開催を決めました。全障研の良さは障害者にかかわる様々な立場の方がおられることです。今回は4人の方にあらかじめ話題提供をお願いし、その中で交流や議論を行いました。

話題提供をしてくださったのは、生活介護事業所で働く方、県立養護学校の教員の方2名、それから障害のあるお子さんのおられる保護者の方でした。職場での職員同士の考え方や情報の共有の難しさ、障害のある人の節目節目での引き継ぎの大切さなど、共通して見えてくる悩みや課題がたくさんありました。その後の意見交換でも、様々な立場の方から「わかる!」「うちの職場でも…」と話が広がっていきました。

それぞれの話題についての詳細は割愛しますが、個人的に印象に残ったのは養護学校の教員の方がおっしゃった、障害のある児童の「自立」をどう考えるか、という話です。児童をほめることはもちろん大切だが、ほめられる行動しかしない「よい子」を育てていないか。本当の自立はできないことも認めて、助けを求められることではないか、というお話でした。私も子どもたちと日々関わる中でたくさん褒めることを大切にはしていますが、知らず知らずのうちにこちらの思う「正解」を押し付けていたのではないかと反省しました。○や×ではなく、△の自分を認められるようになってほしいというお話には私以外にも多くの参加者の方がうなづいておられました。



初のオンライン交流会は、約20名の方に参加していただきよい交流の場になりました。ただ、やはりオンライン上ということもあり、発言の回数は限られ議論を深めていくのには難しさがありました。まだしばらく続くコロナ禍に、どのように会員同士をつなぎ、学びを深め、さらに広げていくのか。今年度の大きな課題として事務局で引き続き話し合っていきたいと思います。

(にむら なつこ)

## ・感想をいただきました・

いろいろな立場の方の悩みや現場の状況を聞くことができたのは、とても良かったです。コロナ禍で、福祉現場の方々が一生涯懸命、障害のある人たちの居場所と生活を守ってくださったことに、自分の考えの甘さや子どもたちの生活に思いを馳せる力が不足していたと痛感しました。自分たちの仕事の役割や責任をもっと主体的に果たすべきだったと反省しました。また、職場づくりという観点でも、共感できるところがたくさんありました。自分の職場よりも厳しい条件の中で、必死に頑張っておられる話を聞いて、自分にももっとできることがないのかと考えさせられました。

お一人お一人の言葉が、想いが、胸に響きました。こんな時だからこそ繋がりたい!大事にしたいものが明確に、共有できました。この状況下でリアル参加したくても出来なかったのが、オンラインをご準備いただいたことそのものが、とてもありがたく、参加できてよかったです。ありがとうございました!



## ありがとう「あゆみ書店」



今年4月末に大津市膳所駅前のあゆみ書店が閉店しました。あゆみ書店は街なかの素朴な小さな(失礼)書店です。ただ他の書店と違い、店主である初代店主である故寺井虎彦さんの存在無しには語れません。

寺井夫妻は、次男の信二さんがどうやら重い障害児だと知ります。1968年重症児の信二さんを当時南郷にある近江学園に預ける決意、寺井さんはこう記しています。

学園の見学の日、家では決して見せなかったこと、スプーンでご飯を食べようとする信二さんの姿に「うろたえ」ます。なぜなら、家ではずっと親が食べさせていたからです。更に「もしかしたら信ちゃんはまだ変わる可能性があるのではないですか」と当時学園の研究部長である田中昌人さんに言われ動揺されます。「このままではあかん、信二は変わることができない」と施設に預ける決意をします。まだ親が子どもをみるのが当たり前の時代。幼い11歳の息子を預けることにどれほど不安で罪悪感があったことでしょう。

しかしこれを境に虎彦さんは持ち前のエネルギーな行動を始めます。1968年誕生した大津市障害児父母の会で「障害児にも予防接種を受けさせてほしい」(=今では考えられないような人権侵害がありました)と教育長に嘆願書を提出し、「教育の権利をどんな重い障害児にも」と父母達の「疑問」を「要求」として束ね、運動へと牽引する役割を寺井さんは果たします。

それはやがて「びわこ学園の子どもにも学籍を」の運動や大津市に生活施設づくりの運動などにも発展しました。

一方、寺井さんは仕事と運動との板挟みに悩みます。「障害児者関連の本がある本屋さんが欲しい」という関係者からのアドバイスで本屋さんを始めます。

開店当時(1972年)は、大津革新市長の誕生、続いて2年後には革新県政を誕生させた時期でもありました。全国障害者研究会がまだ誕生したばかり、滋賀支部の会合を始め、保問研、「9歳の壁」研究会など、2階の会議室は民主運動をすすめる人達のサロンでした。その後20年余り、2階を借りていました。私も学生時代恩師の加藤直樹先生(故人)につれられ、研究会に参加。生意気な私に「もっと現場の人の話を聞きなさい」とたくさんの実践家、例えば森原都さんにも引き合わせてくださいました。

また、私の所属しているおおつ福祉会の原点「こだま日曜教室」を開催されたのもあの2階でした。在宅だった仲間に作業所に行くよう家族を説得します。四ヶ所目の穴太の新天地からは縁の下の力持ちとして、仲間の送迎をされました。私は1990年の4月にこだま共同作業所に就職し、彼の死去を知ります。直接お話する機会には恵まれませんでした。

あれから30年、寺井さんが願ってこられた〈障害児を始めどんな弱者も大切にされる社会〉に一步でも近づいていますか。これからも続く私達の「あゆみ」の原点を忘れてはいけないと思います。

信子さん、長男昭彦さん夫妻、寺井さんの遺志を引き継がれ本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

(くりもとようこ)

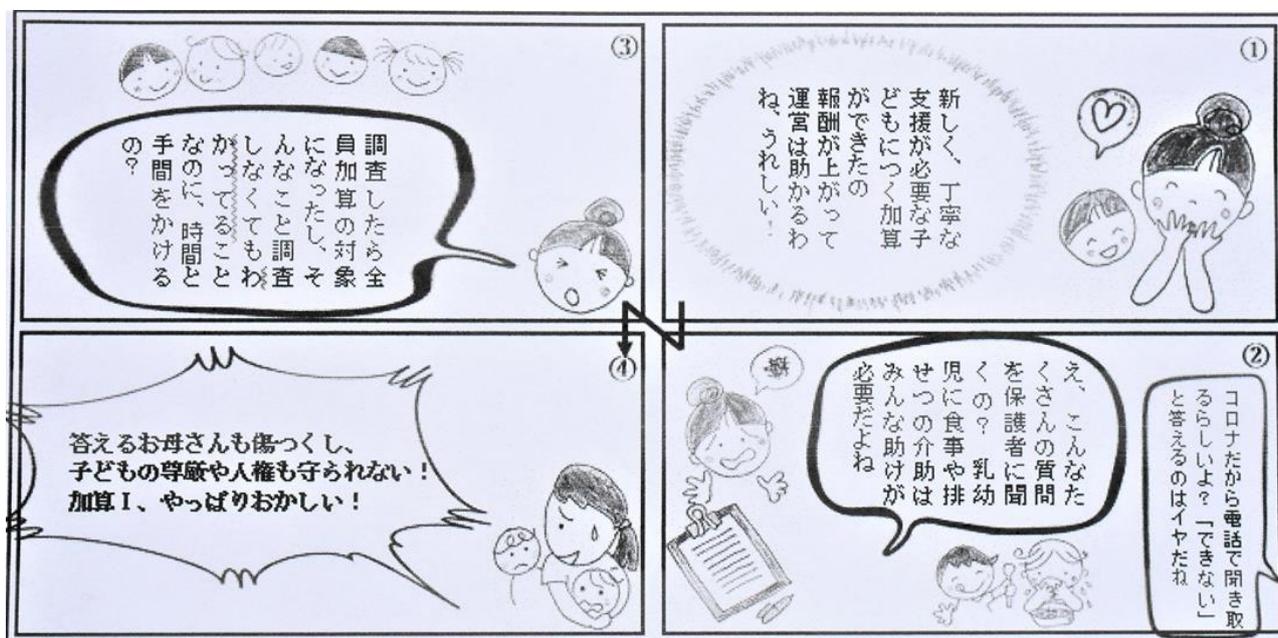
## 皆さん、知っていますか？ 今、障害乳幼児の療育の場で大変なことが…！

2021年度より、発達のみならずや障害のある乳幼児が通う「児童発達支援」の報酬に、「個別サポート加算Ⅰ」「個別サポート加算Ⅱ」が新設されました。一見、「加算がつくのは、いいこと」と思うのですが、その内容や方法を見てびっくり！ 厚生労働省は、保護者の思い、現場のことを全く理解していないのではないかという疑問がたくさん出ています。

「個別サポート加算Ⅰ」は、「ケアニーズの高い障害児」が利用したときの加算であり、その判定のために保護者への聴き取り調査を行います。この調査には、二つの問題があります。一つは、障害がまだ確定せず、それを受け入れていくための苦悩のなかにある保護者に対し、「強いこだわり、多動、パニック」「睡眠障害、食事排せつの不適応行動」「他傷・自傷行為」といった「行動障害及び精神障害」の項目が過半数を占めている点です。それらの特徴の有無を聞かれた保護者は、育児の希望とわが子の成長・発達への信頼を奪われてしまうでしょう。二つ目は、「食事」「排せつ」「入浴」といった身辺自立の項目、そして「読み書き」という項目があげられている点です。障害の有無によらず発達途上にある乳幼児ではみな達成が難しい具体例が提示されています。さらに乳幼児期の発症は稀とされている「そう・うつ」という項目もあげられています。このような乳幼児期の実態を踏まえない調査を行うことは、保護者の困惑をひきおこす非科学的な政策といえます。

「個別サポート加算Ⅱ」は、虐待などの可能性のある要保護・要支援の子どもが利用したときの加算であり、「保護者の同意」を得ることを前提にしています。保護者が、自ら虐待を行なう可能性があることや、子どもが心理的に不安定になるかもしれないことを理解して受けとめることは容易ではありません。結果的に、支援者と保護者との信頼関係が損なわれ、好ましくない心理状態を引き起こす可能性があります。

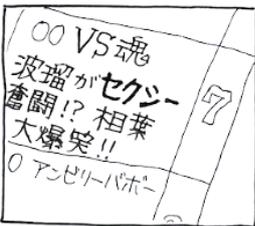
「障害乳幼児の療育に応益負担を持ち込ませない会」では、これらの加算が、その手続きにおいて、子どもと保護者の尊厳、基本的人権を大きく侵害するものであることを訴えています。こういった拙速な加算のための聴き取り調査は、子どもの分野の障害程度区分の認定に向けた布石と思われ、それを断じて許すことはできません。厚生労働省に対し、ただちに中止を求めることとあわせ、「法の下での平等」を守って、保育などの一般の子ども支援制度として位置づけたうえで、「特別なケア」を行う条件を加えた療育実践ができる基本報酬にすることを求めます。詳しくは、[みんなのねがいWEB/全国障害者問題研究会 \(www.nginet.or.jp\)](http://www.nginet.or.jp)から「子どもの支援」のリンクをご覧ください。



## PONTAの 8 ゆるい日々

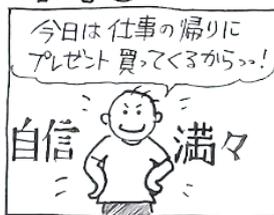


毎朝テレビ欄をチェックするPonta

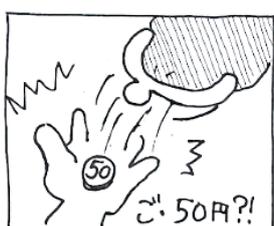


Pontaは いったいどんな 波瑠さんを 想像していたのか?!

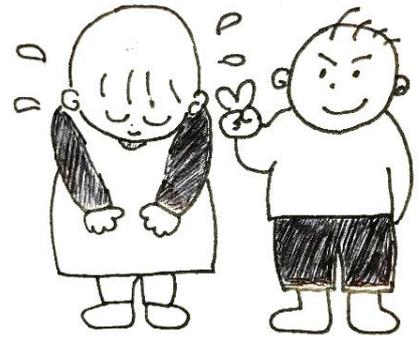
## PONTAの 9 ゆるい日々



今日は 母の誕生日



ごっ 50円?! Pontaのさいふに 300円を入れた母でした



母 ぽんた (19)

Pontaは、18歳のダウン症の男の子です。三人きょうだいの末っ子。

作業所でのお仕事は2年目になり、毎日楽しく通っています。

お給料は大切に貯めて、大好きな嵐のCDや写真集を買うのが楽しみです(^o^)

ただ、お金の計算はまだまだ勉強中で、この間も800円のお会計に1400円出してしまうました…。

## ..あとかき..

今年度も引き続きしがじんの編集担当をします、にむらです。今年も素敵な誌面をお届けできるよう、頑張ります。皆さんからの感想が励みです！ご意見ご感想お待ちしております。



### 「今回の表紙」

今年度の表紙は大津市の「おおぎの里」の皆さんの作品を提供していただくことになりました。

障害者福祉サービス事業所おおぎの里 絵画活動グループ 20歳代~70歳までの利用者が毎週水曜日午後集まり、自由に描いたり、造形表現したりしています。今回は、初夏にぴったりの涼しげな金魚。長い障子紙にたっぷり水を濡らして、水彩画にしてみました。金魚たちは、人間の落ち着きのない毎日をどんな風に見ているのでしょうか。